

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成28年8月7日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 人文科学研究所

職 名・学 年 研究員

氏 名 中屋敷千尋

| | | | |
|------------|---|----------|----------|
| 助成の種類 | 平成28年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成 | | |
| 研究集会名 | 国際会議 人類学と知識の私有化:関与的人類学 | | |
| 発表題目 | 道徳と戦術:北インド、チベット系社会における近代的選挙制度と土着的親族の | | |
| 開催場所 | ドゥブロヴニク・クロアチア | | |
| 渡航期間 | 平成28年5月2日～平成28年5月11日 | | |
| 成果の概要 | タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有() | | |
| 会計報告 | 交付を受けた助成金額 | 350,000円 | |
| | 使用した助成金額 | 350,000円 | |
| | 返納すべき助成金額 | 0円 | |
| | 助成金の使途内訳 | 大会参加費 | 30,000円 |
| | | 交通費(航空券) | 170,000円 |
| | | その他交通費 | 20,000円 |
| | | 宿泊費 | 110,000円 |
| 資料作成費 | | 20,000円 | |
| 当財団の助成について | (今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) | | |

平成 28 年度京都大学教育研究振興財団
国際研究集会発表助成・成果の概要

京都大学人文科学研究所
中屋敷千尋

平成 28 年 5 月 4 日から 9 日の間にクロアチアのドゥブロヴニクにおいて行われた Inter-Congress World Anthropologies and Privatization of Knowledge: engaging anthropology in public は、国際人類学・民族学科学連合 (The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences : IUAES) によって開催された中間会議です。IUAES の会議は欧州を中心として世界中から社会／文化人類学分野の研究者が集まる世界で最も規模の大きい集会のうちの一つです。IUAES の会議は 2 種類に分けられ、4—5 年ごとに行われる本会議と毎年行われる中間会議があり、今回発表者が参加した会議は後者にあたります。会場となったクロアチアは 1990 年代前半にユーゴスラビア連邦解体の過程で起こった内戦 (民族対立) を経験しています。会場近くの旧市街では弾痕が残る建築物をいくつも目にすることができました。このつい最近まで紛争を行っていたという歴史的背景もあってか、民族対立や民族間紛争というテーマでのパネルや発表が多くみられ、東欧をはじめとした多くの参加者がパネルにつめかけていました。また、今回の会議のテーマである知識の私有化に関連して、知識やそれに対する人類学者の態度について扱うパネルや発表が多くみられました。

発表者は北インドのヒマラヤ山脈の中ほどに居住する、少数民族であるチベット仏教徒についての発表を行う予定だったことから、Socio-cultural diversity and linguistic inequality among the people of India というインド人研究者が組織するパネルに参加しました。登録時点で参加予定者は私を除き 6 名いましたが、当日会場にいくと発表者は私一人という状況でした。しかし前後のパネルの方々と協力して結果的には発表を成功させることができました。

発表者は「道徳と戦術：北インド、チベット系社会における近代的選挙制度と土着的親族の交差領域の事例」というタイトルで口頭発表を行いました。

発表の目的は、人類学において議論されてきた道義と戦術という概念の対立関係を再考することにあります。具体的には、北インド・チベット系社会における選挙活動を取りあげ、そこで土着の親族関係が政治的な議論に巻き込まれるという選挙と親族の交差領域の分析を行いました。この分析を通して、戦術性・個人・政治と、道義性・親族・社会という対立は必ずしも有効ではないことを指摘し、人々の行為にみられる道義性と戦術性は、より複雑な様相を呈していることを明らかにしました。

そして重要なポイントとして、そこで言及される道義と戦術は、従来の人々のふるまいに先行する理念的な概念 (外在主義的な前提) とは異なり、日常生活のなかで人々が対面的、相互に関わる中で築かれるものとして再定義されていることを主張しました。すなわち、自律的な

個人が全く自らの自由意志によって戦術的に選択しているわけではなく、かといって道義という社会的な規範によってのみ人々の行為が規定されるわけでもなく、戦術や道義自体、日々の生活における対面行為に影響をうけているということです。本発表は、人類学の議論において外在的な前提として扱われる傾向にあった道義と戦術の対立を、人々のふるまいの中で築かれるものとして、行為の文脈に位置づけ直した点に意義があると思います。

質疑応答では、会場から少数民族としてのチベット仏教徒のインドにおける位置づけについての質問や、選挙と親族の絡まりに僧侶をはじめとした宗教的職能者は影響を与えているのか、与えているとすればどのような影響を与えているのか、という宗教の選挙への影響についての質問を受けました。また、発表者は発表の中でイギリス人類学における親族研究の流れについて多く言及していたため、その流れのなかにエドワード・エヴァン・エヴァンズ＝プリチャードも含めるべきであるというコメントをいただき、議論を行いました。その他細かい質問をいくつか受けました。どの質問も今後研究を発展させる上で貴重なコメントであり、大変有意義な発表の機会となりました。

最後に、IUAES2016に参加するにあたり助成をしてくださった公益財団法人京都大学教育研究振興財団に心より御礼申し上げます。貴財団の助成なしでは学会への参加や渡航は大変困難になっていました。本当にありがとうございました。